

## お盆に因んで(元・8・19)

堀 定雄(昭7文甲)

今もお話のありました通り、この会館が出来たては、丁度、京都に仕事がありましたので、屢々ここへお邪魔したんですけども、京都の本願寺の方の仕事を退きましてからは、田舎へ帰って檀家の人と、お茶でも飲みながら余生を送ろうかと思っておった所が、三年程前から、教誨師という仕事でございまして、これは、皆さん方、ご存知ないかもわかりませんが、刑務所へお話に行く仕事でございまして。

凡そ全国に七四か所、刑務所がございまして。それと五十か所ばかり少年院がございまして。両方合すと、百を越すわけですが、そういう方面へボランティア活動で、その人達の社会復帰を何とか出来る様にとというのが、狙いでございまして、そんな仕事をやっている者が全国で千六百人以上おります。その全国組織の理事長に引っぱり出されまして、富山の様な田舎から何もわざわざ引っぱり出さんでもいいじゃないかと、ご辞退したんでございましてけれども、何でもいいから出て

来い、やれ、と、こういうことで、それとまあ、私よりは十分後輩でございますけども、検事総長をなさった安原美穂さん、この方がそういう方面の親方でございますして、堀君、出て来い、出て来い」と、こういうことでございましたので、お引き受けを致しました。

そんな関係で、この頃は東京の方へ、度々参らねばなりません。従って、この会館へは、ご無沙汰をしております所が、先程申しました様に、井垣さんから、ちよつとご無沙汰が長いから、たまには出て来いとお叱りを蒙りまして、それで、お引き受けを致しました様なことでございます。さつきも、何かレジュメか何かないんかとおっしゃる。実は、若干のものは用意したんでございますが、なかなか文章になりませんで、持って来なかつたんで、何かプリントにでもなさるまでちよつと待ってくれと、ピンチヒッターだから勘弁して欲しいと、こういうことで用意をして参りませんで、従って、ぶつつけ本番でお話をする場合がございますが、大変、今日は先輩、又、昭七会の皆さんが応援団でかけつけて頂きました、心強い思いでおる次第でございます。また、題はどうすればよいと電話のお話だったものですから、丁度、お盆の前でございましたので、坊主らしく「お盆に因んで」とでもした方がいいのじゃないかと、こんなことで題を出した様な次第でございます。

お盆という行事は、仏教行事でございます。仏教というのは、昔から十三宗・五十六派と申しまして各宗が、てんずに喧嘩をしているわけでございますして、余り感心せんことのように思います

けども、喧嘩してゐるんで發展してきたかも知れませんが、そんなことでございますが、このお盆の行事だけは、お彼岸とお盆でございますね。これは各宗派が全部一致してやる行事になっております。そんなことで民族の仏教行事として定着をしておると申してもよろしいだろうと思ひます。

お釈迦さまからいいますと、二千五百年経つわけでございまして、その間に中国・朝鮮半島を通じて日本へ伝来して、日本に伝来してから、ご承知の通り聖徳太子がお取り入れになったわけでございます。その当時には取れ、取るなど、こういう戦争があつた様なことでございしますが、日本へ入つて、又、日本で鎌倉時代にいろんな宗派が広がつて、出て来たわけでございます。けれども、お盆ということだけは、今、申しました様に、各宗がだれも文句いわずにやっておることでございます。

皆さん方の方も、お盆と言へば、京都では大文字が有名でございまして、大文字は、十六日でありますから、あれは、送り火。それから十三日からお盆。その方は、迎え火。迎え火・送り火と、つまり、極楽浄土から亡くなった人が出て来る、お迎えするんだと、こういうことでやっておりますが、仏教盆歌の一節にですね「盆はうれしや、別れた人が、はれてこの世へ会いに来る」とこういう解りやすいことでございます。けれども事の起り、これは、やはりお釈迦さまの時代に起つた行事でございます。というのですね、お釈迦さまのお弟子に、舍利弗・目蓮とい

う二人がいて、これが最高のお弟子だったわけです。

舍利弗は数多いお弟子の中で、知恵第一、理論家だったわけでございます。それに対して、その反対に、目蓮は感情の豊かな、情緒的な人でございます。舍利弗が理性であるのに対して、目蓮は情の人、温情の人である。これが、お釈迦さまのお弟子の二人、双璧だったわけでございます。

ご承知の通り印度は日本と違ひまして、日本は春夏秋冬、四つの四季があるわけでございますけども、印度は乾期と雨期、冬と夏としかないという氣候、環境でございます。四月の中頃から雨期に入るわけですね。お釈迦さまの弟子は外へ出歩く、托鉢をして、乞食をして廻る。雨期に入りますと、そういうことが出来なくなるわけでございます。そうしますというと、内へ籠るんですね、家の中で勉強するということになります。これを、あんごと申しております。安らかに居ると書くんです。安居。雨の降る間、梅雨の間ですね、三か月位は家へこもって勉強する、そういう習慣が出来ておったわけでございます。

その習慣は、今でも仏教の各宗では続けております。夏の間にはですね、日数は各宗派、それぞれの事情によって、いろいろ一週間位で切り上げられる所、長いのは、やはり暑中休暇と同じ様に、一月位、大学研究機関あらゆるもので、その宗派の僧侶を研修する。研修会ですね。そういうことは今でも残っておりますが、お釈迦さまの時代は、大体三か月の梅雨があける。そうする

と、四月十五日から七月の十五日位で、梅雨があけるわけです。そうすると、その梅雨あけに、それを僧自恣と言ひまして、自己反省会という一番いいと思ひます、勉強したことを研究発表し、そして又、その間にいろいろ、反省すべきことが沢山出て来るわけでございます。それを皆さんの前に恥をしのんで懺悔をする。私はこの人と、こういう喧嘩をしました、とかですね、そういうことをやる日が大体七月十五日を中心に行われたわけでございます。

勿論、勉強した研究を発表する人もおりましょうし、今、申しました様に自己反省を皆の前に打ち明ける、そういうことをやるのが、七月十五日を中心に行われたわけでございます。その時に、今申しました目蓮というお弟子が自己懺悔をなさったわけですね。ということは、どういふことかと申しますと、目蓮は、今申しました様に、知恵第一の舍利弗と並んで、お釈迦さまこ一番弟子になつておりまして、大変な出世をしたわけでございます。ところが、それだけのお弟子になりますという、六神通、仏の悟りというものは、六つの神通を自ずから備へることにあります。大変、神通力ということ申しますと、皆さん方は、そんなことを、いつまで言つてゐるやとおっしゃるかも知れませんが、現代的に言えば、これは、人材養成といひますか、能力の開發とでも申しますか、そういうことなんでしょう。

今から、二千五百年前でございます、コンピューターもなければ、テレビ、ラジオも何にもないんですから、紙さえなかつたわけですね。紙が出来て来たのは、二千年この方でございます。

から、そういう時に、みんな勉強してゆくというんですから、仲々、大変なことですけども、まあ、そういう意味で、お釈迦さまの教団、団体では能力を開発してゆくということが、やはり非常な問題だったわけでございます。そういう、このテストに合格していったのは、六神通を開く、悟る、体験する、身につけるといふことで、目蓮尊者は、そういう資格があったとみえます。

そして、その神通力、宿命通というのがあるんですね。自分の可能性を見る能力でございますね。そういうものによって、自分の過去をご覧になりますという、あろうことか、目蓮尊者のお母さん、かわいがって自分を育ててくれた目蓮尊者のお母さんがですね、餓鬼道へ落ちてるんですね。仏教ではですね、(一)が地獄、(二)が餓鬼道、(三)が畜生道ですね、(四)が修羅、それから(五)番目が人間、(六)が天人、(七)が声聞と申します。これは声を聞く、お釈迦さまの弟子ということですね、(八)が縁覚、今日でいうと独学で博士になつたようなんですね。(九)番目が菩薩、(十)が仏ですね。こういう風に我々の環境を(十)に分けます。これを十界と申します。

この三つ、地獄・餓鬼・畜生を三悪道と申します。修羅・人間・天人、これは三悪道に比べると、やや上等なでございます。

人間界に生れて来たといふことは、三悪道を離れて生れて来たんで、これは三善道と申しますね。それから六道、六道の辻に立って、お地藏さんが人を救うと申します。これから地藏盆の季節でございますけども、六道は迷いの境涯たるには変りはないわけでございます。仏の境涯まで

は行けない。そういう六道というのは、迷いの境界であると、こういうことを言うております。

その目蓮尊者のお母さんはですね、三悪道の餓鬼道ですね。これは皆さんもご承知の食べたい食べたい、欲しい欲しいと一心なのが餓鬼道でございます。そこにお母さんがおられる、餓鬼道ですから、やせ細って、骨と皮なんです。それで、目蓮尊者は、どうして母者はこんな姿なんだと、何とかと思つてご馳走を持つてゆくんですね。すると、お母さんは喜んでとびつく。とびつく途端に、それが火になつて燃えてしまふ、食べられない。そこで、目蓮尊者は、非常に悲しまれたわけでございますね。どうしても、この母を救いたいと、こういう願いを起されましたけれども、どうしたらいいか、やはり、それはもう、自分の力では出来ない。

そこで、仏、先生のお釈迦さまに、実は、私は神通力でお母さんの過去を見ると、こういう状態でございます。これが、大衆の前で懺悔する言葉だったんでしよう。これは、なかなか言えないことです。けれども、大衆の前で懺悔された。すると、お釈迦さんは、そうか、それは、それだけお前のお母さんは、けちん坊だったんだな、餓鬼道へ落ちるといふことは、けちん坊だったんだと、だから、その、けちん坊を治せば、いいんだと、お釈迦さまはそう言われた。

それには、どうすればいいのかというので、それには、僧自恣の日、これがお盆なんです。そう言うて、お釈迦さまは、それだけ、よく懺悔したのなら、わしが一つ見てやろうと、お釈迦さまは、もう一つ上等の神通力をお持ちでございますから、見られますというて、お前、どう

や、こういうことがなかったか」とおっしゃったんですね。それはどういうことかと言うと、目蓮がこんなに偉くならん先です。

今日で言うと、中学・高校・大学へ通っている、その位の年代ですね、そういう年代に、お釈迦さまの所へ勉強に通うわけです。その時に、朝、学校へ出がけに、「お母さん、今日は僕の友達が留守中に来るかもわからんから来たら、ちゃんとお昼のご飯を接待して、そして、帰して下さいよ。僕は、出来るだけ早く帰って来るけれども、間に合はんかも知れないから」とこうお母さんに頼んで出かけたんですね。案の定、友達が来ました。

そこで、お母さんは、いろいろ接待をせよと目蓮が言い残して行ったんですね、目蓮のお母さんは、先程申しました通り、大変、けちな人でございますから、とてもお昼ごはんどころではない、何も出さずに帰してしまっただけです。目蓮が夕方帰って来るといって、お母さんが「あつ、友達が来ていったよ、ちゃんとご飯を出した」と言った。お経を読んでみますと言っていると、設飯具と書いてある。お茶碗やら、お皿、そういうものだけ出したというんですね。この様に馳走したよと言つて、目蓮に見せたんですね、実際はご飯出しておらんに。飯具を設くというて、この様にご馳走したと嘘を言ったのです。目蓮は、有難うお母さん、よくやって頂いて、と感謝した。そういうことが、あったんですね。その為に、餓鬼道へ落ちたんやと、そういう事をお釈迦さまが、おっしゃったということでございます。



そこで、それをどうして救うか、それは、そこに集まっている大衆に供養せよ。大衆供養をやれ。

百味の飲食と申しまして、いろいろのご馳走を供えよ、とそういうことが今日でも習慣として残っておりますですね。お盆には、いろんなご馳走をお供えする。お墓へ持って行って。私の所も、お墓にああいうものが来ますと、実に不衛生でございまして、困るんでございまずけども、けれどもお墓へ参られる方は、一心こめて、その人の好きであった物を、ビールとか、お菓子とか、果物とか、そういうものをお供えになるんですけども、お墓へ供えられたものを、こっちは、かすめ取るわけにもゆきませんし、どうにもなりませんので、捨てんなりません、仏教では百味の飲食と申します。今日の言葉で言えば、ご馳走ということ。集まってる人達にご馳走して大衆供養したわけですね。それによって目蓮のお母さんが、餓鬼道から救われて目蓮の所へ出て来られた。そこで母子相擁して非常に喜んだ。そこから踊り、盆おどりの行事なんかも、そういう所に由来しているわけでございます。

お盆の事を西本願寺では歓喜会と申します。よろこぶ法事、かんぎの集いである。歓喜会、つまり目蓮と母が相擁して悦びの踊りを踊った。悦んだと。おどり上らんばかりに悦んだ行事である盆というのは、そういうものである。ですから、先程申しました様に、「盆はうれしや、別れた人が、はれてこの世へ会いに来る」とこういう歌が出て来る様ないわれがあるわけでございます。

す。

それで、この三悪道と三善道、つまり地獄・餓鬼・畜生道の三悪道、それから、修羅というの  
は、争いばかりする人の世界でございませぬ。今の国会みたいな所は、修羅と、こう申します。  
それから、人間、我々は、人間の境涯におけるわけでございませぬ。それから、天人というのは、  
我々よりは少し上等の境涯、今日では皆電気洗濯機から冷蔵庫から、何でも文化生活というもの  
は、至れりつくせりになって参りまして、大体皆様方、天人の境涯にいらっしゃるんだと思っ  
てすね。けれども、これは、転落の恐れがあるんです。自民党の様に、あんまり自惚れていると  
選挙で落とされんなりません。天人なんです。

これはいい例があるんです。お釈迦さまの弟さんです。ナンダという人ですがインド  
語ですから、ナンダ。この人がスングリーというインド一の美人をお妃にしてくださる、非常に境  
涯を喜んでおられたんです。けれどもお釈迦さまの所へ行つて弟子に入られたんです。ところが、  
お釈迦さまが「ナンダ、お前にいいものを見せてやろう」と、こう言われました。どんなものか、  
天人の境涯を。お釈迦さまが今日のテレビみたいなものですかね、大変な、そしてそこには、  
自分の奥さんのスングリーよりも、もっと美人の人が沢山おる。天人の境涯ですから、そういう  
所をみせた。そして、もうナンダが自分の大事な奥さんを忘れてしまつてです、天上界の天  
人を好きになつてしまふんです。そして、お釈迦さまが「お前、自分のスングリーを忘れたん

か」と、「いいえ、忘れせんけど、私の家内よりそんな立派な美しい人がおるんですか」とこ  
う言う。それじゃ、お前にもう一つ見せよう。と言うて今度は地獄を見せられました。

地獄といえますと言うと、鬼が金棒を持って、こういう大きな釜にです、熱湯をわかしてい  
る。それで、ナンダはですね、「あれは何の為に釜に湯をたぎらせているんでしょうか」「それは  
鬼に聞いてみよ」とこう言われた。ナンダが鬼に恐れ恐れ「お前、熱湯を沸かしてどうしよう  
と言うのか」と聞いた。「今、天上界にナンダという者がいるんだ、それが、やがて、ここへ転  
落して来る、それを待ち受けているんだ」と言った。ナンダはそれを聞いて身の毛もよだつ様に  
自分の心根の浅ましいことに気がついたら、こういうお話がございしますが、そういう仏教の説話  
というものは、いろんなことが出て参りますね。

天人の境涯というものは転落する。久米の仙人は天上におったんです。けれども川で洗濯して  
いる、御婦人の姿を見た途端に、何か迷いが起つて地上へたきつけられた。とこういうお話は、  
皆さんもよくご存知のことだと思えます。そういうことでございしますね。声聞は先程申しました  
様に、直接お釈迦さまの声を聞く弟子ですね。それから、縁覚というのは、先生なしに独学で博  
士になれる様なお方、このお方を縁覚。この二つは二乗衆、どっちかと言うと、つまり小乗の  
境涯。

仏教には、大乘と小乗、二つございしますね。お釈迦さまのおっしゃることをその通り守る。こ

れもなかなか大変なことでございます。けれども、それを一步も出ることが出来ない人を小乗。

大乘は菩薩を入れますと三乗衆。お釈迦さまの弟子は、三つの種類に分類出来たわけでございますが、それを、大小を乗り越えて仏の境涯に達する。こういうのが仏教の教えでございます。

その中に聖道門と浄土門、私共は親鸞聖人の教えに従って、浄土の教えですね、大乘、小乗と申しますが。お釈迦さまの教えというものは八萬四千の法門と、こう申しますが、それが大乘、小乗に分れる。も一つの分かれ方は聖道。これ禪宗ですね。それから浄土の教え。大きく分けますと、大体、この二つに分かれます。

浄土の教え、聖道というのは、即身成仏、この世に於いて、悟りを開いて仏に成る。お釈迦さまはそうだったんですね。二十九歳の時に、お釈迦さまは妻子、眷族、皇太子の位を捨てて修行に入られました。そして六年間、三十五歳の時、菩提樹の下で仏の悟りを開かれました。二十九歳から修行を始めて、六年間で、三十五歳の時に悟りが開けた。実に立派な事だと思えますね。

私は昭和七年三高卒業で、本年とって七十九歳でございます。今だに悟りが開けません。誠に恥ずかしい次第でございますが、お釈迦さまは三十五歳で悟りが開けました。けれども、それには、所謂二十九歳の時に妻子眷族を捨てたんですから、財産も一切捨てたんですから、出家、家を出る、だから坊さんの事を「出家」、家を出る、これが僧侶としての、本来の姿でございます。

お釈迦さまと同じ事です。けれども、それに対して皆さん方は在家なんです。家を出ていらっ

しやらない。死ぬ迄妻が恋しい、子供、孫が可愛い。仕事は儲けんならん。これを一生懸命やっていたらっしゃいますから、仲々家を出るわけにはいかない。そうすると言うと、在家のお方は、仏の救いから、いつ救いを得る事が出来るんだと、こういう事が問題になって参ります。

そこで、出家はどちらかと言うと、聖道門ですね。聖道の教えに依って修行する。それに対して、在家の人は浄土の教え、娑婆で生きている時は、仲々仏の事には関心が無い。気持ちも動かす事が出来ない。けれども、教えを聞いて気持ちも動かす事が出来ない。けれども、教えを聞いて仏の救いに与る事が出来る。と言うのは、極楽浄土へ参って仏に成る、と言う方が浄土の教えでございます。そんな難しい話を、いくらしても切りがありませんが、今から十年程前に五十回忌が済んだんですから、明治の中葉、島根県に浅原才市という人がいました。

下駄の歯を直してゐる人ですね、我々皆、子供の時分の事、下駄の歯を直して、町をつーと車引っぱってですね、高下駄の歯を入れ替える仕事をやっている。これは、決して学識があるわけでもなければ、財産があるわけでもありません。寧ろ、貧困と言った方がいい位です。けれども、これが非常によくお説教を聞きましてね、悦びの言葉と言うか、歌とかを一杯書いて残してました。それを、もう亡くなられましたが、鈴木大拙博士が島根県へ行かれた時に、その遺族が、家の爺さんはこんな物を書いておったんですが、これ何でしょうかねえと言つて見せた。そして、鈴木博士がそれを読まれて、正しくこれは生き仏やと言つて太鼓判を押された。そういう人

を妙好人と申します。私も最近それを読んだんですけども、この人の詠んだ歌に大変感動を受けました。それは、こう言うんですね。「私じゃ極樂見た事無いが、南無阿弥陀仏になりや見える。それが本当に南無阿弥陀仏」と、こういう歌が、それだけじゃありません。沢山あるんです。私じゃ極樂見た事無いが、先程も申します通り、七十九歳に成っても、まだ極樂浄土を見た事がありません、私は。私じゃ極樂見た事無いが、南無阿弥陀仏になりや見える、何とかして、この境地に達したいと、私は今心掛けている様な次第でございます。

大変、雑駁なお話を申し上げて、大変恐縮を致しておりますが、今日は大変暑い中を、こうして同窓の好誼をもって、多数の皆さんが、お集まりを頂きまして誠に感謝に堪えません。「お盆に因んで」の題のお話は、この位で切り上げさせて頂きたいと存じます。

御清聴誠に有難うございました。

(西本願寺派蓮照寺住職  
全国教誨師連盟理事長)